

共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」研究発表会  
(九州大学国際ホール、2012年9月29日)

## 中立形接続とテ形接続の分化

益岡隆志 (神戸市外国語大学/国立国語研究所客員)

### 1 はじめに

日本語の連用複文構文

多様な接続形式群があり、類似・類義形式が競合・共存する。

本発表では、いわゆる「連用中止」を取り上げる。

中立形 (いわゆる「連用形」とテ形の競合・共存

(1) 駅前に白いビルがあり、そのビルの1階に銀行がある。(日本語記述文法研究会編 (2008))

本発表では、「中立形接続」と呼ぶ。

(2) 駅前に白いビルがあって、そのビルの1階に銀行がある。(日本語記述文法研究会編 (2008))

本発表では、「テ形接続」と呼ぶ。

本発表の目標

動詞述語の場合を対象に、連用中止にかかわる中立形接続とテ形接続の関係を「接続形式の分化」という観点から分析する。

本発表の構成

- ◇動詞の中立形とテ形の機能
- ◇中立形接続とテ形接続の異同、及び、それらの棲み分け
- ◇接続形式の分化という観点による分析

### 2 動詞の中立形とテ形

動詞の活用 (益岡 (近刊))

「中立形」(いわゆる「連用形」と「テ形」の機能

◇中立形

準語幹的・機能無指定であり、名詞用法などの用法を持つ。

- (i) 名詞用法、(ii) 複合・派生の語基、(iii) 尊敬形の形成
- (iv) 「～ハ＋スル」の形成

◇テ形

中立形に「テ」が付加したものであり、接続(連用接続)機能を持つ。

中立形の上記用法は持たない。

cf. 補助動詞構文

3 中立形接続とテ形接続の異同

3.1 名詞の並列

無助詞 vs. 助詞介在

単純列挙 vs. 関係づけ

- (3) 海、山、まち一ロケ地になった神戸を歩こう(「神戸シネマップ」)
- (4) 海と山とまち
- (5) 神戸と私

3.2 中立形接続とテ形接続の機能

積極的な関係づけを受けるかどうかという点において、中立形接続とテ形接続の関係は、名詞並列表現に見られる関係に並行するところがある。

◇中立形接続：構成要素の単純列挙

- (1) 駅前に白いビルがあり、そのビルの1階に銀行がある。

動的な事態の場合

構文レベルでは、当該の事態間に継起/因果という意味関係が含意されやすい。

cf. 東森・吉村(2003)、Blakemore and Carston(2005)

- (6) メーン会場は、ロンドン東部を再開発した五輪公園。周囲には巨大ショッピングセンターも建設され、荒廃した土地は「五輪の街」に再生した。(神戸新聞 2012/07/28)

意志性の有無

(7) 手を洗い、おやつを食べた。[意志的] ⇒ 継起

(8) 悲しい話を聞き、涙がこぼれ落ちた。[無意志的] ⇒ 継起 + 因果

#### ◇ テ形接続構文

接続機能(関係づけ)

「テ」の付加(組み込み)により連用関係を明示する

連用関係の主要な意味領域を包含する

[時間・論理(広義因果)・様態]

(9) 手を洗って、おやつを食べた。

(10) 悲しい話を聞いて、涙がこぼれ落ちた。

(11) 参加者は、幹事を入れて8人だ。

(12) 悪事を見て見ぬふりをする。

(13) 立っておしゃべりをした。

(14) タクシーに乗って駅まで行った。

\* (9) ~ (14) は日本語記述文法研究会編(2008)から引用

### 3.3 テ形接続と並列関係

動詞のテ形が状態的事態を表す場合

時間性(継起性)から解放され、並列関係を表し得る。

(2) 駅前に白いビルがあって、そのビルの1階に銀行がある。

テ形接続が表す連用関係の主要な意味領域

「並列・時間・論理(広義因果)・様態」(「広義連用関係」)

連用中止用法における中立形接続とテ形接続の異同のまとめ

(15) 連用中止用法における中立形接続とテ形接続

中立形接続：単純列挙(並列)の表示を基本とし、場合によって連用関係の一部(継起/因果)の意味を含意する。

テ形接続：広義連用関係の主要な意味領域である「並列・時間・論理(広義因果)・様態」の意味を包括的に表す。

#### 4 中立形接続とテ形接続の棲み分け

両者は「継起/因果」の領域と「並列」の領域で競合関係にある。

⇒両者はこれらの領域でどのように使い分けられるのか？

##### 4.1 継起/因果の領域

###### ◇継起

先後関係が明瞭な場合はテ形が優先される。

(16) よく {考えて／(?)考え} お返事いたします。

###### ◇因果

###### テ形

動的事態でなくても成立するという条件の緩和

(17) 多くの同窓生に {会えて／(?)会え} 嬉しかった。

従属節の焦点化(取り立て)の可否

(18) 史上最年長での達成はしなやかな体があつてこそ。(朝日新聞  
2012.5.5)

(19) しなやかな体があつてこそ、史上最年長で達成できた。

(20) \*しなやかな体がありこそ、史上最年長で達成できた。

##### 4.2 並列の領域

単純列挙では中立形接続が優先される。(cf. 久野(1973)、新川(1990))

同類の事態の同次元的な共存関係

(21) 太郎はよく {勉強し／?勉強して}、よく遊ぶ。(久野(1973))

(22) 彼らはパリの自由を愛し、パリの芸術を愛した。(小谷瑞穂子「ユダヤ系芸術家たち」)

(23) 年の頃は五十二、三であろうか、物腰の柔らかな品のいい女性で、  
ていねいな言葉で応対してくれる。十年の知己のような自然な態度  
で、お茶をすすめ、お菓子を出す。(白洲正子「遊鬼 わが師わが友」)  
関係する複数の事態を分立・対比する場合も、同次元的な共存関係を表  
すことから、中立形接続が優先される。

(24) 著者が一方では「日本の黒い霧」のような作品を書き、他方では  
推理小説に新風をもたらした文学的必然みたいなものも、...。(平野

謙「黒地の絵」解説)

- (25) オリックス担当時代の宮古島キャンプでは皆が泡盛をぶっ倒れるほど飲まされ、その一方でちょっとしたネタを教えてもらった。(小西慶三「イチローの流儀」)

中立形接続とテ形接続の連続

同次元的共存関係 vs. 連用関係

- (26) このささやかな山村の内部には、それらすべてのものがからみ合い、交り合って、複雑な様相を呈している。(白洲正子「近江山河抄」)
- (27) 周辺の人口が減り、競合店も増えて赤字からの脱却が難しくなった。(神戸新聞 2012. 6. 25)

内省判断

- ①「減り/増えて」 ②「減り/増え」  
③「減って/増え」 ④「減って/増えて」

継起/因果と並列の領域で競合関係にある中立形接続とテ形接続であるが、両者はそれぞれの優先領域を分かち合うことで棲み分けを行っている。

#### 4. 3 日本語のテ形接続構文と英語の分詞構文

益岡 (近刊)

テ形は Bloch (1946) のいう” gerund” よりも” participle” に近い。

テ形接続構文は英語の分詞構文に近い (cf. 早瀬 (2002))

テ形節の内部制限

テ形節の内部にはテンス・モダリティを表す要素が現れ得ない

⇒英語の分詞節と同じくテ形節も非定形節である

#### 5 接続形式の分化

中立形接続とテ形接続の関係

競合する中立形接続とテ形接続がいかに共存するか？

(28) 連用中止用法における中立形接続とテ形接続 ((15) の改訂)

中立形接続：単純列挙(並列)、及び、そこから派生する萌芽的・部分的な連用関係(継起/因果の関係)を表す。

テ形接続：「テ」の付加(組み込み)により、連用関係(「並列・時間・論理(広義因果)・様態」という広義連用関係)を全面的・明示的に表す。

接続形式の分化 (益岡 (2006、2011))

ベース形式と発展形式の分化

A: 基本となる「ベース形式」から、それに特定の要素が組み込まれて形成される類義的な「発展形式」が派生・分化する。

B: ベース形式に部分的に存在する特性が発展形式によって全面的・明示的に表される。

C: 発展形式の形態には縮約が見られる。

中立形接続(ベース形式)とテ形接続(発展形式)

中立形の接続において萌芽的・部分的に存在する連用関係が「テ」を組み込んで形成されるテ形の接続において全面的・明示的に表される。

テ形接続への統合

現代の話し言葉の傾向 (\*データ未確認)

中立形接続の使用が縮小

テ形接続が中立形接続の基本領域である並列の領域に拡大適用

テ形接続への統合

テ形接続による広義連用関係の包括的表示⇒テ形接続の汎用的使用

6 おわりに

本発表の要点

(i) 中立形接続は単純列挙(並列)、及び、そこから派生する萌芽的・部分的な連用関係(継起/因果の関係)を表す。他方、テ形接続は「テ」の付加(組み込み)により、広義の連用関係(「並列・時間・論理(広義因果)・様

態」の関係)を全面的・明示的に表す。したがって、動詞について「連用形」という名称を用いるとすれば、その名称にふさわしいのは本発表の「テ形」である。

(ii) 中立形接続とテ形接続は、「ベース形式と発展形式の分化」として捉えることができる。それに関係して、現代語の話し言葉には発展形式であるテ形接続への統合の傾向が認められる。

#### 参考文献

- 内丸裕佳子 (2006) 「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』2巻1号.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版.
- 久野暁 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 言語学研究会・構文論グループ (1989a) 「なかどめ—動詞の第二なかどめ—のばあい」言語学研究会編『ことばの科学2』むぎ書房.
- 言語学研究会・構文論グループ (1989b) 「なかどめ—動詞の第一なかどめ—のばあい」言語学研究会編『ことばの科学3』むぎ書房.
- 近藤泰弘 (2012) 「平安時代語の接続助詞「て」の様相」『国語と国文学』1059号.
- 新川忠 (1990) 「なかどめ」言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房.
- 鈴木重幸 (1996) 『形態論序説』ひつじ書房.
- 坪井美樹 (2007) 『日本語活用体系の変遷 (増訂版)』. 笠間書院.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
- 中俣尚己 (2007) 「日本語並列節の体系—「ば」・「し」・「て」・連用形の場合—」『日本語文法』7巻1号.
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」『複文の研究(上)』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法第6巻:複文』くろしお出版.
- 早瀬尚子 (2002) 『英語構文のカテゴリー形成—認知言語学の視点から—』勁草書房.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開:認知とコミュニケーション』

ン』 研究社.

益岡隆志 (1997) 『複文』 くろしお出版.

益岡隆志 (2006) 「条件表現と事態の非現実性」 益岡隆志編『条件表現の対照』  
くろしお出版.

益岡隆志 (2011) 「原因理由を表すダケニとダケアッテの分化」 『日本語・日  
本学研究』 第1巻、東京外国語大学国際日本研究センター.

益岡隆志 (近刊) 「日本語動詞の活用・再訪」 三原健一・仁田義雄編『活用論  
の frontline』 くろしお出版.

松本克己 (1995) 『古代日本語母音論』 ひつじ書房.

宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪郭』 三省堂 (くろしお出版復刊、2009).

三上章 (1963) 『日本語の構文』 くろしお出版.

渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書房.

Alpatov, V. M. (1995) "Converbs in Japanese." Haspelmath, M, and E.  
König (eds.) *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*. Mouton de  
Gruyter.

Blakemore, D. and R. Carston (2005) "The pragmatics of sentential  
coordination." *Lingua* 115.

Bloch, Bernard (1946) "Studies in colloquial Japanese, Part I,  
Inflection." *Journal of the American Oriental Society* 66.

Dixon, R. M. W. and A. Y. Aikhenvald (2009) *The Semantics of Clause  
Linking*. Oxford University Press.

Hasegawa, Y. (1996) *A Study of Japanese Clause Linkage*. CSLI Publications  
and Kurosio Publishers.

Haspelmath, M. (1995) "The con-verb as a cross-linguistically valid  
category." Haspelmath, M, and E. König (eds.) *Converbs in  
Cross-Linguistic Perspective*. Mouton de Gruyter.

König, E. (1995) "The meaning of converb constructions." Haspelmath,  
M, and E. König (eds.) *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*.  
Mouton de Gruyter.

Myhill, J. and J. Hibiya (1988) "The discourse function of  
clause-chaining." Haiman, J. and S.A. Thompson(eds.) *Clause  
Combining in Grammar and Discourse*. John Benjamins.